

ぽぽ



H19.2.10

第6号

発行 学生ボランティア団体 ぽぽ

配膳・配茶

毎週水曜日の17時半から南病棟9階の整形外科病棟にて行っています。最近、配茶は病室で夕食を食べられる方のみが対象となりました。そのためこれまでとは違い、4人部屋では声を掛けない方も出てきました。同じ部屋にいなが声をかけない人もいるということは少し複雑な気持ちになりますが、公平性を重視するために仕方のないことかなと思います。事前に渡されたリストをチェックし、見落としがないよう気をつけていきたいです。病室にはいると「今日はボランティアさんの日か。ありがとう。」や「ご苦労様。」などと言ってくれる方もいて、とても嬉しく思います。

濱田恭世



移動図書



昨年からは毎月第2・4月曜日の16時半から南病棟2階の小児科病棟で行っています。病室の前の廊下から「こんにちは。移動図書です。」と声かけをしながら病棟を回っていき、来てくださった方に本の貸し出しを行っています。時には本を借りに来てくださる人数が、1人、2人という週も珍しくはありません。しかし借りに来てくれる人数は少なくとも、私たちの声かけと同時に「待っていました!!」と言われんばかりにたくさんの本を抱えてきてくださったり、真剣なまなざしでじっくり本を選んでいる子ども達の姿を見ていると、移動図書をやってよかったなとしみじみ思います。

山崎絵美子

園芸

月に3回程度、精神科病棟のとなりのお庭で活動しています。社会人ボランティアの方々を中心となり、草抜きや水やり等お庭の整備や、花植え、最近ではお庭の寒さ対策も行っているそうです。私もまれに参加させていただくのですが、お庭の花々は寒さにも負けずきれいに咲いていて、「お世話をしていると本当にかわいらしい。」とおっしゃる社会人さんの気持ちが分かるような気がしました。

また、私が参加させていただいた日にはちょうど、精神科の患者さん達がお庭で焼き芋パーティーをなさっていてとても楽しそうに見えました。お庭は患者さん達の憩いの場になっているのだなと思いました。

原田真実



恋の物語 作:ひしかわさん

11月17日、たねおとたねこは、帝釈峯に紅葉を見に行きました。時期的に少し遅かったようで、赤や黄色に染まったもみじがハラハラと舞落ちており、落ち葉の絨毯ができてました。それはそれで、とても美しい景色でした。たねこが、赤いもみじを拾って、たねおに聞きました。「何で赤色になるのかしら。」たねおは、「それはね、黄色のもみじに恋をして、頬をそめてるからだよ。」と答えました。「あら、じゃあ、私がピンクなのも、あなたに恋をしているからなのね」二人は見つめあい、赤く染まったのもみじよりも赤く染まりました。そんな二人を見て私は、初恋で完全に両思いだった〈自称〉岡くんを思い、頬を染めました。

〈もう、えーっちゅうねんっつ〉つづく??

鹿田祭で配ったたねおを使って素敵な物語を作っていただきました。本当に有難うございます。



読み聞かせ



毎週水曜日の15時から16時まで、小児病棟のプレイルームで入院している子ども達と一緒にゲームをしたり工作をしたりしています。毎週、季節にあった様々な企画を考えて、子ども達にいろいろな遊びを体験してもらおうと工夫しています。すごく楽しそうに笑顔浮かべながら遊ぶ子ども、いろいろ話しかけても頷くだけで表情をまったく変えない子ども、恥ずかしそうに親御さんにくっついてくる子どもなど、プレイルームに来てくれる子どもは様々です。しかし、どの子どもにも共通していえることは、みんな遊ぶことに対して真剣だということです。表情一つ変えずに真剣に工作に励んでいた子どもを見ていて、私としては楽しめたかなと半信半疑だったのですが、病室で親御さんに得意げにできあがった作品を見ている姿を見て嬉しくなりました。一緒に遊んでいる1時間の間にいつも色々なことを考えさせられます。例えば、クリスマスという行事。子どもにとって1年に1回サンタさんがやって来てくれる大イベントです。やっぱり楽しくワクワクしているのだろうか。それともクリスマスを病室で迎えなければいけないことを思って悲しく思っているのだろうか。病室がかわいらしく飾り付けられていく様子をぼんやり眺めている子どもを見ながら考えさせられることは多かったです。いつも手探りでいまだに分からないことだらけですが、闘病中の子ども達にほんの少しでも楽しい時間をもってもらえるよう、これからも笑顔絶やさず頑張っていきたいと思います。

湯浅可奈子

ぼぼクリスマス会

12月12日にぼぼのクリスマス会をしました。今年のクリスマス会には、鹿田祭でいつもお世話になっている弥生さんとつばささんがバルーンアートショーをしてくださいました。子ども達も家族の方も私達も、みんなとても楽しむことができました。小さい子から小学生くらいまでの子がみんな楽しそうに笑っていたのがとても印象的でした。最初は何が始まるか恐る恐る見ていた子どもだんだん積極的になり、バルーンを作る弥生さん・つばささんの質問に答えていました。また一緒に見ていたお母さん達も子どもの笑顔を見て嬉しそうに笑っていたのも印象的でした。

中嶋美奈



クリニックin岡山大学病院小児科病棟

H18年8月6日、岡山大学病院小児科病棟にクリニックラウンがやって来ました。H17年の日本病院学会でクリニックラウンと出会ったことをきっかけに、もっとたくさんの人に知ってもらいたい・クリニックラウンの活動を広めたいという私たちの思いから、その年の鹿田祭医学展でクリニックラウンについての展示を行いました。そしてその思いが協会に届き、今回のクリニックラウン訪問に繋がったのです。この日は私達ぼぼのメンバーにとっても忘れられない1日となりました。

私が病院の中に笑いとユーモアを取り入れて自分も働いていきたいと思うようになったのは、高校時代に読んだ「パッチアダムスと夢の病院」という本が始まりでした。大学に入った頃(パッチが岡山に来た翌年)はパッチアダムスや笑いとユーモアについてもっともっと知ってこうという決意をしていたのですが、なかなか行動に移すまでには至らず、あっという間に時が流れていました。そんな時、OGの小林真美さんに誘っていただいた『日本病院学会』のランチョンセミナーに参加し、クリニックラウンのことを初めて知ったときの感動はとても大きく、クリニックラウンの存在をまったく知らなかった私は、「日本にもこんな面白い活動をしている人がいたんだ〜!!」と、とても興奮し熱くなったことを今でも覚えています。その時は、約1年後、まさか岡山大学病院にクリニックラウンが本当にやって来るなんて思っていませんでした。ぜひたくさんの人にクリニックラウンの活動を知ってほしい、そしていつか岡山大学病院にも来て欲しいという思いから、一昨年鹿田祭からクリニックラウンのついでに展示を始め、そこから始まったたくさんの方々との出会い、つながりのお陰で今回の訪問が実現できたことはとても感慨深いことでした。



実際に病棟での活動を見て・聴いて・感じてみて、クリニックラウンが単に病棟の子ども達を笑わせようとしているのではないということが分かりました。彼らは本当に子どもコミュニケーションのプロだと思います。子どもの成長には、彼らが笑顔で過ごせる時間はとても大事です。しかし、それだけでなく子どもの人間性を豊かにしていくには、笑うことも、怒ることも、泣くことなどたくさんの感情も体験が大切なんだということをクリニックラウンを通して考えさせられました。今回のクリニックラウンの訪問を通して感じたことを大切に、これから出会うたくさんの人がその瞬間に見せる感情をしっかり受け止めて関わっていけるよう、自分の感性を磨いていきたいと思っています。

山崎絵美子

鹿田祭

昨年続き、11月3・4日の鹿田祭で、クリニックとぼぼの活動についての展示を行いました。今年は8月6日に岡山大学病院小児科にクリニックが訪問して下さったこともあり、私たちのモチベーションも高く、たくさんの方のアイデアを取り入れながら昨年よりさらに充実した展示を行うことができました。

クリニックについてのビデオを見ることができ、何よりバルーンアートを体験できたことがとても印象的です。また来客の皆さんが、クリニックの資料や物品を手にとっているのを見て、私も少しは「笑いの種」の役割が果たせたかなと思いました。 山北佳奈



あの活動に参加できたおかげでクリニックが子ども達のために一生懸命元気づけを行っていることが分かり、しかもそれを無償でしていることに感動しました。 柏葉香織



クリニックの展示をすることで、見に来てくれた人だけでなく、自分もクリニックについて知ることができたのでよかったです。クリニックの話聞いて想像していたのと、ビデオで見た姿は違っていたので、機会があれば実際に会ってみたいと思いました。クリニックの活動は医師や看護師、その他の医療に関わる人にできない活動で、患者さんにも大きな影響を与えています。今回の展示によってクリニックが、もっと多くの人の中に広がるきっかけになれば嬉しいと思いました。また風船で楽しそうに遊んでいた子どもたちがすごく印象的でした。そんな笑顔を見るといっそう病院内で笑顔が広がればいいなと思いました。

松森千春



去年に続いて今年もクリニックの展示を行いました。8月に実際に岡大病院の方にクリニックの方が来て下さったこともあり、その時の様子をビデオで流し、また撮った写真をプリントアウトしてファイルに閉じて、来て下さった人に見ていただくことができたので、少しでもクリニックの存在やその活動について知ってもらえることができたのではないかと思います。私自身もまだまだ知らないことばかりで、この展示をすることによってクリニックのことに理解を深めることができました。クリニック協会のビデオの最後に病気のお子さんがでてきて、「もっと遊びたかった」という文字がテレビ画面に表示されたときには、少し胸が痛くなりました。またクリニックの活動は子ども達を笑わせることは目的としておらず、病気のために自分の素直な感情を出すことができなくなってしまったりした子ども達に、素直な感情を取り戻してもらうことを大切にしていることを知りました。クリニックのこのようなすばらしい活動をもっと全国に広げていけるように、クリニックの存在について少しでも多くの人に知ってもらいたいです。また今回の鹿田祭の展示に来て下さった方にフウセンカズラの種とかわいいマスコット『笑いの種～たね たねお』をプレゼントしましたが、皆さんが喜んでくれて良かったです。鹿田祭前日の準備と鹿田祭当日の2時間くらいしか参加できなかったのですが、ほんの少しでもこの展示に関わることができて良かったです。来年もクリニックについてもっと多くの人に知ってもらえるように展示ができればいいな、と思います。そして岡山大学病院のほうにもまた、クリニックが来て欲しいと思います。 内仲彩子

私は展示場に来て下さった方に対し、クリニックについてうまく伝えることはできなかったのですが、流しているビデオを真剣に見てくださる方や、風船をもらって喜んでくださる方を見てとても嬉しいと思いました。 原田真実

今年は初めてグッズ販売を行いました。グッズをどのくらい仕入れたらよいか悩みました。レッドノーズが無事に完売して良かったと思います。初めはどのような感じで売ったらよいか分からず、本当に売ることができののだろうか不安に感じました。しかし先輩方の上手なやり方を見て色々試してみました。買ってもらえたときは嬉しかったです。また展示やビデオをじっくり来て下さる方もいました。その反面、自分の知識の乏しさも痛感し、質問に曖昧にしか答えられなくて申し訳なく思いました。今回の展示は本当にいい思い出になりました。たくさんの方の助けが成功に繋がったと思います。 濱田恭世



鹿田祭

クリニックの展示は、予想以上にたくさんの方に興味を持っていただけたのではないのでしょうか。医学生だけでなく、鹿田祭に来られた患者様や地域の皆様が熱心にビデオやパネルをご覧になられ、「すごいね。」「知らなかった。」などの声が多く聞かれました。また、私たちボランティア学生もクリニックについて深く知り、考えることができました。なかでも、先輩からの「入院している子どもは大人な子どもが多いんだ。子どもに子ども時間を作ってあげなければならない。」という言葉が胸に残っています。大学病院には難病と闘う子ども達がたくさんいます。「子ども」が「子ども」に戻れると時間をばばやクリニックを通して楽しんでもらいたいと思います。より多くの病院でクリニックの考えが広まり、また岡山大学病院にもクリニックが再訪問してくれることを願って、これからも子ども達と子ども時間を楽しんで過ごしていきたいと思います。

山本美香子

今年は展示に加えて、グッズ販売や種のプレゼントなど新たな取り組みがあったことで、より充実した内容であったように感じました。バルーンを楽しんでくれるお子さんや展示を見てくださる方が多くいて下さり、とても嬉しく思いました。普段の生活の中でクリニックを知るきっかけはなかなかありませんが、このような機会を通じて少しでも多くの方にクリニックの存在や活動を知っていただければ良いなあと思います。

中川成華

昨年に引き続き、多くの方々のご協力により、本年もクリニックの展示をすることができました。8月にデモンストレーションとして岡山大学病院にクリニックの訪問があり、ばばで見学したりお話を聞くことができ、より具体的な展示や説明ができたのではないかと思います。グッズ販売という新たな試みもありましたが、募金も含めて多くの方にご協力いただきました。来てくださった方々とお話したり、バルーンアートをしたりと、私たちが展示をたのしむことができました。多くの方々に興味を持っていただくことができ、今後もこの活動が継続できればと思います。

沖彩子



クリニックに関わっては1年がたちました。ばばの中で、クリニックに関わっていると分かりにくいですが、今回の展示で一般の方や医療者の方に少しずつクリニックの認知度やよさが浸透している手応えを感じました。去年と比べて、知っていると答える方が多く、熱心に岡大訪問のビデオを見ていかれる方もいました。また、活動の意義に賛同して自ら募金をしてくれた方も増えたように思います。長期入院の子どもたちにクリニックを通して、笑いやユーモア、病院の外の風を伝えることはもちろん大切です。それに加えて、今回のようにクリニックを通して、入院をして治療をがんばっている子どもたちの現状を伝えることも同じように大切であると感じました。それがきっかけで、訪れた人たちが子どもたちを気にとめてくれたり、「何か自分にもできることがあるかも」と私たちと同じように感じてくれれば、とても嬉しいです。そのようにばばが子どもたちと外とのパイプ役になればいいなあと思います。

兵田直子

クリニックの展示に当たって、日本クリニック協会、岡山旭東病院『あかいはな道化教室』のみなさまをはじめ、多くの方々にご協力いただき、実施することができました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ご協力ありがとうございました。

編集後記

ばばの活動を続けていると、「つながり」の存在というものを強く感じます。同じ思いをもって活動していれば、いつか必ずどこかでそのつながりのもとに人は出会い、互いを強く結びつけている絆へと深まっていきます。そしてその絆たちは、きっと自分の人生をより豊かなものへと導いてくれます。私は、ばばを通して、本当にたくさんの方々とお会いすることができ、その出会いを通してたくさんの学びをさせていただきました。今までに出会ったたくさんの方との絆を大切に、これからも日々精進していきたいと思っています。

……たねお